



館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 6 月 20 日(木)

発行 館長 加藤 智 一

東京水

連日 30℃ を超える日が続き、昨日は山形県内で 10 名の方が熱中症の疑いで救急搬送されたとか。「熱中症予防にはこまめな水分補給を。」とはよく聞く言葉ですが、今、屋外の水場（公園なんかの）を取り巻く環境はどうなっているのか、東京都の事例を調べてみました。

ちょっと前なら、「東京の水はまずくて飲めない」などと陰口を叩かれる存在でしたが、今はなんと、東京都水道局が企画・販売する「東京水」と銘打ったペットボトル入りの水道水が、安全でおいしい水プロジェクトの PR の一環として販売されていたのです(500ml のペットボトルに浄水処理をした水道水（塩素除去済み）をつめたもので、2021 年 10 月をもって製造販売をすべて終了）。



東京都が導入したのは、高度浄水処理。通常の浄水処理よりも高度な浄水処理方式です。ちなみに東京都では平成 25 年（2013 年）度に高度浄水処理の導入が全量完了しています。

高度浄水処理とはいかなるものなのか。浄水場において、「通常の浄水処理」は凝集沈殿と濾過等を組み合わせて濁質を取り除きます。それに加えて、粒状活性炭処理、オゾン処理、生物処理を施して、溶解性のカビ臭・カルキ臭・トリハロメタンなどを取り除く方式が「高度浄水処理」です。粒状活性炭処理では、目に見えないほどの小さな穴が無数に開いている粒状活性炭を用いて、水中に溶け込んだ臭いの元となる物質やトリハロメタンを取り除きます。そして強い酸化力と殺菌力を持つオゾンを用いたオゾン処理によって、水中のカビ臭の元となる物質を分解します。そしてさらに、微生物による水の浄化作用を利用した生物処理では、ハニコームチューブ



というハチの巣型のチューブに空気を送り込みながら水を何度も循環させ、ハニコームチューブに付着した微生物が水の中の汚れを分解します。

このような過程を経て精製処理された東京の水は、公共性の高い場所に設置されている水飲栓やイベント時に設置される可動型水飲栓「Tokyowater Drinking Station」として展開しています。これにより、都内約 900 箇所で飲むことができます。また、ボトルディスペンサー型の一部では、ピクトグラムや点字で表示されており、車椅子にも対応したユニバーサルデザインとなっています。もうまずいとは言わせない。熱中症予防のために、安心して東京の水道水を活用してくださいとのこと。

6/18（火）朝日新聞より

気象病

台風の到来時や季節の変わり目に体調を崩すなんて話はよく聞きますね。私の妻も、以前から気圧の変化に敏感で、頭が痛くなると次の日雨だったりなどと言うことが度々ありました。

天候の変化で現れる症状は、頭痛、関節痛、倦怠感、肩こりなどですが、その原因は、耳の奥にある「内耳」が気圧の変化を感じ、脳に余計な刺激を伝え、自律神経が乱れるなどすることにより体の不調を引き起こすというものらしいです。特に梅雨の時期は、低気圧が前線の上を繰り返し通過する時期で、毎日のように気圧が変化し、多くの人が不調を訴えるとのこと。

しかし、最近は、気象病対策の市販薬も販売されているし、「天気予報」ならぬ「天気痛予報」のスマホアプリが存在し、発生予測をしてくれるそうです。これも一つの「備える」という視点からすれば、温暖化対策と言えるのかもしれない。